

ジェネラル・ソーシャルワークによる支援技術体系化の試み

- 実習の達成課題における人間性にまつわる技術の意義と位置づけ -

同朋大学 安井 理夫 (4944)

キーワード：ジェネラル・ソーシャルワーク 人間性 専門性

1. 研究目的

ソーシャルワーク実習の達成課題に関する提案の代表的なものには、原田和幸（日本社会福祉教育学校連盟 2005年 以下「学校連盟版」とする）と相談援助実習ガイドライン（日本社会福祉士養成校協会 2008年 以下「社養協版」とする）の2つがある。

前者の特徴のひとつは、(a)「自己理解と自己活用」、あるいは(b)「利用者の理解・関係形成」に分類される技術（skills）にも他の技術と同程度のウエイトが置かれていることである（全83項目中42項目）。本報告では「人間性にまつわる技術」を、これら2つを指す語として用いたい。報告者が「実習・教育」領域ではなく「方法・技術」領域での発表を希望したのは、これらの技術が、ソーシャルワーク理論というフィルターを通して専門職の価値として結実させることをめざした実践者自身の生き方や発想に根ざしたものであり、ソーシャルワークの専門性の中核を担うものであると考えたからである。

しかし、後者になると、(a)の技術のほとんどが削除され、(b)に関しては「利用者と関わることができる」に代表されるような専門性を認めることが困難な課題が集団や地域についてもあげられているのみである。その理由は「実習生の社会的マナー、態度並びに自己覚知は、社会福祉援助技術等の他の科目、学生生活、個人生活等を通じて習得すべきもの」と考えられているからである。しかし、ソーシャルワークは価値に根ざした専門職であり、また専門職としての高い倫理も求められている。それらは基本的には実体験（実習）を通じて習得すべきものだと考えられる。また、報告者らが昨年行なった調査（安井、小榮住、田崎 2011年）においても、児童分野の福祉施設が新入職員に求める資質として、このような技術は他の技術とおなじように重視されていることが示唆された。

したがって、本研究では、価値や倫理とソーシャルワーク理論、手段としての支援技法・制度の活用などがどのように有機的につながり、ソーシャルワークという支援方法の体系を形作っているのかを、支援技術の側面からまとめることをめざしたい。

2. 研究の視点および方法

太田義弘が提唱するジェネラル・ソーシャルワーク（価値・知識・方策・方法という4つの構成要素からソーシャルワークをとらえ、制度・政策へのフィードバックも支援過程に含めた理論）にもとづいて、学校連盟、社養協、マクメイアン（MacMahon, O. M.）によって提示された達成課題や支援技術をまとめ直し、不足しているものを新たに加える。

その際、技術を前述した4つの構成要素をつなぐための方法ととらえ、価値 知識（自己尊重）、知識 方法（自己管理）、方法 方策（自己吟味）、方策 価値（自己活用）という4つの象限にそれぞれ分類された人間性にまつわる技術の意義と、それ以外の技術・技法との有機的なつながりを明らかにしたい。（まとめた結果は当日資料として配付する）

3．倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して行なっている。

4．研究結果

(1) 価値 知識

自分のありのままの気持ちを尊重することは自分自身を尊重することにつながる。そして、それを他者に伝え尊重される体験は、それがすべての人に保証されたとき「自分もOKで、あなたもOK」という共生社会のひな形となり、ヒューマニズムの具体化となる。これは自己実現につながる技術である。そこから、利用者が追求している生き方について考えたり、専門的な価値の意義を理解することが可能になるだろう。

(2) 知識 方法

自分自身がことば・行動などの選択の主体であるためには、自分に関するさまざまな情報を収集・分析し、コントロールできなければならない。そこから、利用者や利用者の抱えている課題を理解するときの焦点や、利用者を取り巻く社会資源の状況を分析するときの方法を発想できるようになるだろう。それらは社会的自律性につながる技術だといえる。

(3) 方法 方策

受けとめにくい言動・行動・状況などに自分なりに向き合い、自分の先入観や考え方の傾向、実際の行動などを吟味することを通して、(a)実感を形成し、「今ここで」起こっている気持ちやできごとに納得しながら生きていくための、あるいは(b)考え方や価値観の異なる他者と協働するための対処方法を学ぶことができる。それはデモクラシーの基盤であり、そこから、利用者が自分のあり方に気づくのを支援するための技法を理解できるし、支援過程においてさまざまな専門職と連携したり、利用者のエンパワメントを構想するときの方法論を学ぶこともできるだろう。

(4) 方策 価値

つまり、自分が専門職の価値に根ざして生きていくことと、利用者支援するときの方法は同じ原理にもとづいているといえる。この象限には、これら以外にも、支援を科学化するための指標や、よりよい実践をめざすための方策が含まれるが、今回の発表では、社養協版のような「業務」に専門性を見いだそうとするオリエンテーションではなく、ソーシャルワークの視野や発想がそこから発現していくような支援者自身の価値観や生き方に関する技術こそが、専門性の基盤であると考えられる点を報告しておきたい。